

『獲得名号自然法爾御書』の釈風について

——天台教学との関連性——

四 夷 法 顕

はじめに

親鸞の思想形成には、二十年間修学したとされる天台教学の要素が介在することは言うまでもない。本稿では『獲得名号自然法爾御書』（以下、『自然法爾御書』と明記）に示される釈風から、天台教学と関連すると思われる箇所を指摘する。

親鸞の最晩年の法語として聞き書きされた『自然法爾御書』は、従来より「親鸞の到達した最も深い思想を示すもの⁽¹⁾」として受け入れられている。その法語において天台の釈風が認められるのであれば、青年時代に修学した天台の釈風が、生涯を通じて思想形成の礎となっていたという事が出来る。

尚、現存する『自然法爾御書』は（一）高田顕智本、（二）文明本『三帖和讃』所収本、（三）『末灯鈔』所収本の三本あるが、本稿では高田顕智本に依って考察をすすめる⁽²⁾。

一 円融の論理

天台において空諦・仮諦・中諦の三種の観念は、互いに孤立することなく相即無礙であり、随縁の諸法は総じて三諦を具するものである。この三は互いに相即する故、一即三・三即一・互具互融であるから「円融の三諦」といわれ、諸法実相の真理とされる。天台の祖師慧文は、『中論』のいわゆる「三諦偈」⁽³⁾に依って三諦円融の教理を開顕したとされ、「円融」の思想基盤には無自性・空の要素が介在することが知られる。天台の薫陶を受けた親鸞は、「円融至徳嘉号」⁽⁴⁾と、名号に「円融」の理念を用いている。名号の力用について『自然法爾御書』には「自然といふはもとよりしからしむ」といわれているが、「おのづからしからし」められる根拠に、「行者のはからひにあらず」して「如来のちかひにてあるがゆへ」といわれている。「如来のちかひ」とは「若不生者不取正覚」の誓いであり、衆生の往生と仏の正覚は自他相互の対立関係

『獲得名号自然法爾御書』の釈風について（四 夷）

二八

ではなく、生仏不二の救いである。また、『唯信鈔文意』には「過去今生未来の一切のつみを善に転しかへなすといふなり」と、『中論』を基盤とする転成思想を自然のはたらきとして示されるように、一即三・三即一・互具互融といった相即を明かす「円融」は、「おのづからしからしむ」という自己一如・生仏不二の救いとして、自然なる名号の活動態として明かされる。

二 天台本覚法門との関連

親鸞の自然法爾思想について、特に日本中世の天台において強調された、現象する具体相を絶対的一元論で捉える天台本覚法門から影響を受けたとする指摘がある。⁽⁶⁾では果たして親鸞の自然法爾思想は本覚法門を思想背景としているのだろうか。

まず「自然」とは、『法華玄義釈籤』に「任運」の異名であるとされている。⁽⁷⁾「法爾」は『翻訳名義集』に、人為を超えた因果必然の道理と理解され、「自然」と同義とされる。⁽⁸⁾この「おのづからそうになっている」という意味をもった「自然」や「法爾」の語は、現象世界を絶対肯定化する本覚法門で多用され、このことが親鸞の自然法爾思想を本覚思想に位置づけることとなった要因の一つに考えられるのである。

ところで、親鸞は「自然」と「法爾」の用語を用いている

が、「自然法爾」という四字熟語は用いていない。浄土真宗の文献で初めて「自然法爾」の語が出てくるのは、蓮如時代の古写本である聞名寺本であるとされている。⁽⁹⁾まずこのことを以て、「自然法爾」の用語を根拠にして本覚法門と関連づけることへの疑義が生ずる。親鸞の「自然」と「法爾」の依拠であるが、「自然」は正依『大経』を受けるのは明らかであり、「自然」に関して言及する文言は数えるに違がない。

次に「法爾」は、法然の説示を受けるものと考えられる。『諸人伝説の詞』には、阿弥陀仏の来迎は、念仏する者を迎へとらんとする本願の徳用であるといわれている。⁽¹⁰⁾ここでは阿弥陀仏の法は焰が空へと昇るように、その物がもつ本質を表す「法爾道理」のうちのひとつとして挙げられており、因果必然の道理という、いわば一般的な意味で用いられているといえよう。しかし重要なのは、ここで初めて「法爾」と阿弥陀仏の法が繋がることである。親鸞の「法爾」の解釈は、この法然の説示を受けてさらに展開したものと考えられる。

親鸞は「自然」について、「おのづからしからしむ」といわれているが、これはある対象が「何か」によって「おのづからしからしめられている」という状況を指す。その説明として「法爾」の概念が導入されるのである。即ち、「法爾」といふは、この如来のおむちかひなるがゆへに」と、「この法のとくのゆへにしからしむといふなり」をつなげること

よって、「法爾」は阿弥陀仏の本願の徳によってしからしめられるとされる。つまり、「法爾」とは「自然」の内実を明かすもので、「法爾」の「法」とは本願を指すことになる。このように、親鸞において「自然」及び「法爾」の思想は、本願によって「おのづからしからし」められるものであり、一切のはからいが否定される廃立を顕し、本覚思想を意味するものではない。即ち、用語に関せば「自然」は正依『大經』、「法爾」は法然の説示を受けるものであり、思想構造は廃立を顕すため、用語・思想ともに現象世界を絶対的一元論で捉える本覚法門から直接影響を受けたものではない。

その一方で、釈風については影響がなかったとは否定できない。『自然法爾御書』には、「自然といふは、もとよりしからしむといふことはなり」や、「はしめてはからはざるなり」といわれ、「もとより（本）」と「はしめて（始）」という表現が用いられている。この釈風は、典型的な本覚思想が説かれる『三十四箇事書』に、「迷悟本より体一なり。水波これ一つなり。…（中略）…今始めて不二体一と知るが故に、遣る（¹¹）と云う」といわれる様に、始覚より本覚を優位におく本覚法門では多く用いられる釈風である。無論、親鸞の用例は本覚思想を意味するものではなく、「はしめて」とは衆生のはからい、「もとより」は自然の法則を顕すのであり、本願の救済活動を顕す用語に転用しているのである（¹²）。

『獲得名号自然法爾御書』の釈風について（四 夷）

三 転声釈

叡山の解釈法に（一）字訓釈、（二）字象釈、（三）転声釈が用いられている（¹³）。親鸞は「信文類」三問答などに字訓釈を施しているのは周知のことであるが、親鸞と同様に叡山で修学した道元の『正法眼蔵』にも字訓釈（¹⁴）が見られることから、やはり親鸞の字訓釈は天台の解釈法に依るものであろう。

人為を超えて事態が任運なることを意味する「自然」は、本来「おのづからしかり」と読まねばならない。しかし、親鸞は「おのづからしからしむ」と、特異な読み方をしている。この転声について、源信が撰述したとされる『六即義私記』に同様の釈風が見られる。

第一釈読点云 妙音ニモ加レテ仏ヲ云々

第二点 妙音ニハ加レテ仏ヲ云々

第三点 妙音ハ加レテ仏ニ云々

第四点 妙音ニハ加レテ仏ヲ云々

出拠となる未再治本（青蓮院本）『六即義私記』の閲覧が出来ない為、註15佐藤論文を参照。

とあり、『法華經』に説かれる「妙音」の相について、四種の転声を施している。親鸞の「自然」の転声も、かかる叡山の釈風を用いたものであると考えられる（¹⁵）。

おわりに

以上、『自然法爾御書』の釈風と天台教学との関連性について、三つの観点より考察した。

(一)「円融」とは本来、空仮中の三諦が「即三・三即一・互具互融」といった相即を明かす用語であるが、親鸞は「円融至徳嘉号」といわれている。即ち、親鸞において円融の論理とは、「おのづからしからしむ」という自他一如・生仏不二の救いである、名号の活動態として明かされている。

(二)天台本覚法門との関連においては、親鸞の「自然」と「法爾」の言葉の依拠、及び思想概念は『大経』と法然教学を受けるもので、本覚法門を顕すものではない。しかし、「もとより」と「はしめから」という表現は、本覚法門で用いられる釈風を、念仏成仏には一切のはからいが否定されるという、廃立を明かす用語に転用したものと考えられる。

(三)転声釈に関しては、天台の解釈法と類似しているという指摘に留まっているため、確たる論証は難しい。但し、同じく叡山で修学した道元が親鸞と同様に字訓釈を用いている点、また親鸞は源信の『往生要集』⁽¹⁶⁾ほか、『一乗要決』からも大きな影響を受けており、その源信撰とされる『六即義私記』と同じ釈風が見られるということは注目すべきである。

このように、親鸞の最晩年の法語である『自然法爾御書』

に天台教学の釈風が多く見出されることを考慮する時、親鸞の思想形成にあたり、叡山修学時代に培われたものが生涯を通じて影響を与えていたということが出来よう。

- 1 林智康「親鸞と法語『自然法爾』」(『印度学仏教学研究』第三二巻第二号、一九八四年)。
- 2 本稿で引用する高田顕智本の原文は、『高田学報』第七二輯(一九八三年)に掲載されている写真版に依る。
- 3 『大正蔵』三〇・三三三頁。
- 4 『浄聖全』二・六頁。
- 5 『浄聖全』二・六八七頁。
- 6 田村芳朗氏などによつて指摘されている。(『鎌倉新仏教思想の研究』平楽寺書店、一九六五年)
- 7 『大正蔵』三三・八四一頁。
- 8 『大正蔵』五四・一〇八五頁。
- 9 梯實圓「いわゆる自然法爾法語について」『歴史と仏教の論集』日野照正博士頌寿記念論文集(自照社出版、二〇〇〇年)。
- 10 『真聖全』四・六八三頁。
- 11 多田厚隆、大久保良順、田村芳朗、浅井円道『天台本覚論』(岩波書店、一九七三年)。
- 12 梯實圓「獲得名号自然法爾の字訓」(『行信学報』第一三号、一九九九年)。
- 13 前田慧雲『天台宗綱要』(東洋大学出版部、一九九一年)。
- 14 『大正蔵』八二・一七五頁。
- 15 佐藤哲英「親鸞教学と叡山教学」(『親鸞聖人研究』龍谷学会、一九六〇年)。
- 16 拙稿「親鸞の一乗思想における叡山教学の受容」(『真宗学』第一二九・一三〇合併号、二〇一四年)。

〈キーワード〉 天台、円融、自然法爾、本覚思想、転声釈

(龍谷大学大学院研究生)